



とこなめ陶の森
資料館 企画展

瀧田家の 廻船文書展

たきたけの
かいせん
もんじよてん



瀧田金左衛門の印 (江戸～明治時代)

2018年 4月28日(土) - 6月24日(日)

9:00-17:00 月曜休館 (祝日の場合は翌日)

特別講演会

常滑船と瀧田家

講 師：高部 淑子氏
（日本福祉大学知多半島総合研究所）
日 時：5月12日(土) 13:30～15:00
会 場：資料館2階 講座室
参加費：無料 (予約不要)



とこなめ陶の森 資料館

常滑市瀬木町4丁目203番地

TEL: 0569-34-5290

www.tokoname-toumomori.jp

たぎ たけ たぎ たけ もん じよ
 瀧田家と瀧田家文書

常滑市の中心部にあたる北条に居住した瀧田金左衛門家（以下、瀧田家）の始まりは定かではありませんが、初代金左衛門^{（ひんぶん）}は元文5年（1740）没とされており、遅くとも18世紀初頭には独立した家として営まれていたと考えられます。

瀧田家が大きく成長したのは四代金左衛門（安政3年〔1856〕）、五代金左衛門（明治24年〔1891〕）の頃です。この四代金左衛門は渡辺与惣左衛門家^{（わたなべよそうざえもんけ）}からの養子といわれ、廻船業を始めた時代でもあります。四代・五代にわたり船主として船を増やし、それとともに常滑焼の窯の権利を保有するなど経営を発展させ、現在のやきもの散歩道にある「廻船問屋瀧田家」として公開されている住居の建造もこの二人の頃に進められました。その後、所有した船の事故や経済情勢の変化により、瀧田家は明治18年（1885）に廻船業から手を引き、六代幸治郎、七代貞一が明治5年（1872）に開業した木綿問屋^{（もめん）}や織布生産を経営の中核とし、知多半島の木綿業や常滑の地域発展に尽力しました。

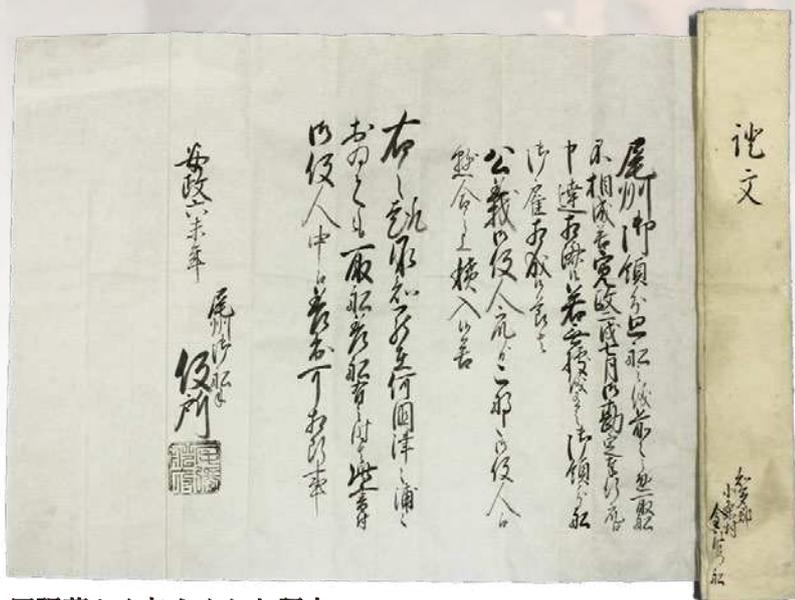
今回の企画展では瀧田家に伝来した古文書の調査をおこない、常滑の周辺や知多半島西側の廻船の活動を示す文書を展示しています。

 江戸時代の物流と常滑船

海に囲まれた知多半島では中世の頃から船が輸送・移動の手段として使われてきました。中世の頃の文書は残っていませんが、船は大型の荷物、重い荷物を長距離輸送するのに不可欠な存在でした。その証拠に常滑の甕や壺^{（かめ つぼ）}が、北は東北地方、南は九州地方にいたるまで大量に運ばれていたことが遺跡の発掘調査で明らかとなっています。

江戸時代になると、弁財船が遠距離を運ぶ廻船として活躍します。廻船とは荷物輸送を専門とする船のことで、一般的には二百石積以上の船を指します。知多半島には大きく、半島東側の亀崎・半田・富貴（武豊町）、西側の常滑・野間（美浜町）、南側の内海（南知多町）などの廻船の拠点がありました。これら尾張藩領内の船は尾州廻船として東西の物流の大動脈となり、物資輸送に携わる廻船へと成長していきました。

常滑船は主に伊勢湾と江戸方面の間を航海し、常滑からは甕・瓦・急須・酒器・花器などがあり、伊勢方面からは米・茶・酒・干大根・水油・糠・木綿・材木などの多種多様な商品が扱われました。これらは江戸周辺の生活必需品、当時の流行を支える嗜好品、幕末の開港後の輸出品です。つまり、当時の日本や日本人の生活と密接に結びついていたことが理解できます。常滑の廻船が大きく発展した背景には、常滑の良好な立地条件が関係しており、濃尾平野・伊勢平野が広がる高い生産力を持っていた点、木曾三川を始めとする中小河川が桑名・四日市・津・熱田など多くの湊と結びつき、それらの集合体としての伊勢湾奥部を常滑が拠点としていた点にあると考えられます。



尾張藩から与えられた証文



瀧田弥太郎に宛てた糠の送り状